

## Controversies in Periodontology ―ペリオをめぐる論争

アメリカの歯学部大学院教育は文献を読むことから始まる。様々なバックグラウンドを持つ学生達が早く一人前になれるように、先人たちの過去の業績を疑似体験とするのだ。試行錯誤を排し最短距離で専門医として必要な知識を培う。つまり“科学的根拠”（EBM=evidence based medicine）に基づく教育が行われるわけである。

しかし EBM 思想の導入により歯周病の世界は一枚岩になったかという事はどうシンブルではない。歯周病学にインプラントが持ち込まれたこと、成長因子製剤（エムドゲイン、GEM21S、リグロスなど）が再生療法に応用されたこと、またレーザーなどの新しいテクノロジーが導入されたことなどによりさらに多くの混沌がうまれている。そもそも科学のみでは料理しきれないほど歯周病学、あるいは歯科の世界は深く多様なのである

例えば重度歯周病に罹患した歯の治療法だけについても、非外科か、外科か、はたまた抜歯→インプラントかと、術者により（または患者の好みにより）大きく治療法が異なる。そもそも従来からある治療法についても、一定のガイドラインはあるものの、それに従って治療をすればすべて治ることが約束されているわけでもない。

同時に MIST、NIPSA、といった略語で代表される、治療法のイノベーションもうまれている。ペリオをめぐる論争はつきることはないのである。

本講演では、それらの論争の中から、歯周病の病態、再生療法の意義、インプラント周囲炎治療などをピックアップして、歯周治療の今日について考えてみたい。